

2024年度 学校自己評価シート(浦和実業学園高等学校)

目指す学校像	「実学に勤め徳を養う」(校訓)に則り、円満な人格、健康な身体、豊かな教養を備え、勤労と責任を重んじる国家社会の有為な形成者を育成する。
--------	---

重 点 目 標	1 学力の伸長(授業の充実と家庭学習の習慣化、能動的な学習態度の涵養)	達 成 度	A ほぼ達成 (8割以上) B 概ね達成 (6割以上) C 変化の兆し(4割以上) D 不十分 (4割未満)	出席者 懇話会委員4名 学校関係者5名
	2 自己実現のための進路指導の充実(進路実績の向上・高大連携への対応)			
	3 徳育の推進(基本的生活習慣の確立と人格の陶冶)			
	4 実学の実践(学校行事の充実と地域社会との連携)			
	5 生徒募集活動の充実(志願者数の増加と募集定員の確保)			

学 校 自 己 評 価					学校関係者評価	
年 度 目 標					実施日2025年6月21日	
番号	現状と課題	具体的方策	達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	意見・要望・評価など
1	○本校は普通科5コース、商業科2コースあり、幅広い学力層が各々目標を定め学習に取り組んでいる。理解度や目標には個人差があり、各生徒の意欲や能力を把握し、コースの特色を活かした学習指導が必要である。特に商業科は新コース制3科目目で、充実した進路指導を行う。 ○学力の三要素①「知識・技能」②「思考力・判断力・表現力」③「主体性を持ち多様な人々と協働して学ぶ態度」の育成を目的とした学習の必要性が新学習指導要領に認識されている。そのためICT教育や「アクティブラーニング」を今まで以上に前面に押し出した授業や、生徒が自ら考え行動できる教育環境作りが必須である。 ○教員のスキルアップへ向けた校内・校外研修はこれまでに組織的に実施しており、引き続き内容を精選して行う必要がある。 ○欠席者が多いクラスや学級閉鎖のクラスを対象に、リモート授業や「スタディサプリ」「Classi」を利用した課題配信を実施することで、担任が家庭学習の様子を改めて確認することができ、改善すべき指導方法(課題の質や量など)についても再確認することができた。ただし1年生へのタブレット配付が6月なので、より早い対応ができるよう改善が求められる。	○授業や定期考査はもちろん、小テストや単元テスト、模擬試験、休業中の課題等を通して生徒一人ひとりの理解度を正確に測り、それぞれに応じた学力伸長を図る。 ○新学習指導要領をふまえ、選定した新教材用教材を有効に使い、iPad等を用いた授業(ICT教育)を積極的に行う。 ○今年度から校内研究授業を前期(新人教員の育成)・後期(昨年度からの教科・学年を越えた「授業相互見学」の充実・活用)に分けて実施する。iPadを用いたICT教育や主体性を伸ばす「アクティブラーニング」等、今後の学習活動に必要な点や改善すべき点を教員が互いに知る良い機会なので、今年度も期間をも長く設定して実施する。 ○「授業アンケート」を実施し、生徒の意識を理解したうえで授業改善につなげる。また、生徒自身の授業に取り組む姿勢についても再確認させる。 ○課程・コースに応じた学習課題を日常的に与え、授業内容の補完と家庭学習の習慣化を目指す。また家庭学習をより充実させるため「スタディサプリ」「Classi」を用いた学習課題の配信や確認テスト等を実施する。さらに担任および教科担当研究会等(オンライン形式含む)に積極的に参加し教員のスキルアップを図る。 ○三者面談で保護者と生徒の意思確認を行い、進路目標実現へ向けた協力関係を構築する。 ○単年度ごとの指導にならないようにコースごとに成績や進路の目標を具体的に設定し、担任と教科担当が同一見解のもとに学習・進路指導を展開する。実績継続のために各学年・コース間の連携はもちろん、所属学年を越えた縦の連携を図る。 ○入試形態の多様化から、学校推薦型・総合型選抜希望者へ対して「入試内容の確認」「小論文や検定級取得対策」「模擬面接」への主体的な取り組みを促す。同時に一般選抜に備えた受験科目の学習も並行して取り組むよう指導する。 ○一般選抜受験者に対しては、「志望校選択」「受験までの学習計画」をしっかり立て、最後まで諦めずに取り組むように指導する。 ○課外の進路補習講座や検定対策講座を積極的に受講するよう促す。また、各学年で自習室等を準備し、生徒の質問等に対応できる環境作りを行う。	○一昨年に導入した観点別評価に基づいた学習方法も2年目を迎え、校内の全教室においてホワイトボードとプロジェクターを完備し、授業方法は大きな転換期を迎えた。学力の三要素「①知識・技能」「②思考力・判断力・表現力」「③主体性を持ち多様な人々と協働して学ぶ態度」の育成を目指し、昨年の反省も踏まえて学習指導を行ったことで、生徒の学習意欲や学力の向上につながった。 ○校内研究授業は、以前のような代表者のみが授業を行う形式ではなく、4月から9月までは赴任2年目までの教員を中心に専門科目の「授業見学」を実施。後期は10月～2025年2月までの約5ヶ月間に、教科や学年の垣根を越えた学校全体の「授業見学」を実施している。上記にもあるように今年度は全教室においてホワイトボードとプロジェクターが設置され、これまで以上にICT機器を用いた授業や生徒の主体性を伸ばす「アクティブラーニング」等の、観点別評価のポイントとなる取り組みを互いに見学することができ、参考点や改善点を見つけてより良い授業を目指すべく実践した。またICT教育にも更に入力を入れ、X-Wordが自由に使用できる他、デジタルノート機能を活用して全生徒の意見を集約・返答することができるclasspad.netを活用した。また全生徒にgoogleアカウントを配信することでgoogle meetによる遠隔授業やclassroomを用いた課題のやり取りを可能にしている。それにより石川県私学協会から視察が来るなど、本校のICT教育は全国からも注目を浴びることとなった。 ○生徒対象授業アンケートを11月に実施。集計をもとに教科会議で協議し、授業改善につなげた。 ○「Classi」や「スタディサプリ」等を用いた家庭学習課題配信等がきっかけで家庭学習の習慣が身に付いた生徒も多く、教員もこれらの「アプリケーション」を利用した学習指導のスキルが向上し、生徒一人ひとりの学習状況の把握も効率よく行うことができた。	A B	ICTを用いた学習に対し、下記の内容について教育本部・情報管理部を中心に再度見直しをおこない、学習効果を高める施策を策定する。 ○家庭学習の習慣化と学習状況の把握の強化 「スタディサプリ」「Classi」を用いた課題配信や確認テストの実施に加え、担任・教科担当者が各々の習熟状況(学習時間や到達度など)を効率良く把握し、指導に活かす仕組みをさらに強化する。また「アクティブラーニング」として「classpad.net」を活用した授業を展開し、全生徒の意見を授業中に集約、返答する取り組みをおこなっており、こうした授業活用例が全国で紹介されるなど一歩の結果は出ている。ただ、それも限定的で全教員が生徒の主体性を高める授業を展開できているとはいえず、教員の資質向上および意識改革が必要である。 ○教員のICT活用能力の向上 ICT機器(ホワイトボード、プロジェクター、iPad)を最大限に活用し、「アクティブラーニング」を前面に押し出した授業をさらに推進するため、教員のスキルアップ研修を継続的に行う。ICTを利用した授業相互見学の充実・活用を通じて、教員が互いに改善点や効果的な取り組みを共有し、生徒の主体性を伸ばす授業の質を向上させる。 ○生徒の主体的な学習態度の育成: 生徒自身が「考え行動できる教育環境」をさらに整備し、観点別評価のポイントとなる「アクティブラーニング」等の取り組みを通じて、生徒の主体性を伸ばす。「ICT機器は教員の授業の一助となることを教員が理解し、活用する能力を自分自身でも高める意識が必要である。	本校のICT教育について他県より視察が来たというが、本校内においても最先端に行く教員とそうでない教員の格差があると思われるため、校内外での研修の充実が望まれる。教員の意識改革が望まれる。 出席停止など登校できない生徒に対する遠隔授業について、更なる充実を図ってほしい。 この数年の生徒増に伴い教育の質の低下を心配しているが、教員数の増加も実現できたのは喜ばしいことである。
2	○23年度卒業生(24年3月卒業)の進学状況は、私立大学全体では現役合格者数が減少したが、GMARCHには26名、国公立には5名と上位大学への実績は昨年を上回った。これは特進部が例年より少ない在籍生徒に対し3年間丁寧な進路指導を行った成果である。私立減少の理由は、昨年度より在籍者数が少ない点と、浪人数が増加した点がある。後者は現役合格大学より上位の大学を目指すための前向きな浪人で、来年度より大に期待できる。本校のような大規模校での進路指導は学年単位になりがちで、実績が安定しない傾向も見られるが、20年度以降は合格者が増加傾向で、今後も学年内の横の連携や1～3学年の縦の連携を継続的に行うことが重要である。 ○進路目標を達成するには生徒自身が自己の特性を把握し、早期に目標を設定する必要がある。そのために、進路指導担当と学年が協力して進路講演会等の啓発行事を組んだり、上級学校と連携した見学会等の企画により学校を知る機会を増やす必要がある。 ○授業を補完して学力向上を図るために課外の進路補習講座を充実させる。また、進路目標達成の一助となるよう、普通科・商業科ともに各種検定の取得を推し進めたい。	○各学年の進学係と本校進路指導担当者が連携し、外部講師を招いた進路講演会や大学見学会等、生徒の進学意識を喚起する行事を企画・立案する。 ○二者面談等を通して生徒の適性や進路目標を把握し、学力や適性に応じた進路指導を行う。あわせて、大学の入試説明会や予備校の進路指導研究会等(オンライン形式含む)に積極的に参加し教員のスキルアップを図る。 ○三者面談で保護者と生徒の意思確認を行い、進路目標実現へ向けた協力関係を構築する。 ○単年度ごとの指導にならないようにコースごとに成績や進路の目標を具体的に設定し、担任と教科担当が同一見解のもとに学習・進路指導を展開する。実績継続のために各学年・コース間の連携はもちろん、所属学年を越えた縦の連携を図る。 ○入試形態の多様化から、学校推薦型・総合型選抜希望者へ対して「入試内容の確認」「小論文や検定級取得対策」「模擬面接」への主体的な取り組みを促す。同時に一般選抜に備えた受験科目の学習も並行して取り組むよう指導する。 ○一般選抜受験者に対しては、「志望校選択」「受験までの学習計画」をしっかり立て、最後まで諦めずに取り組むように指導する。 ○課外の進路補習講座や検定対策講座を積極的に受講するよう促す。また、各学年で自習室等を準備し、生徒の質問等に対応できる環境作りを行う。	○進路講演会などの行事を各学年と進路指導室が連携して実施し、1～2学期にわたって生徒の進路意識の高揚を図った。主な具体的内容は次の通り。[リモート実施のものもあり] 【5月】エゴグラム分析報告会(商業1～3年)【6月】推薦・総合型選考委員会通過者進路ガイダンス①(3年)、合同企業説明会(3年)、進学ガイダンス・上級学校体験会(選進2年・商業2年)【6月】上級学校体験会(特進部1・2年)【7月】小論文講演会(商3年)、進路講演会(選進1年)、進路ガイダンス(商1年)【8月】キャリアガイダンス(特進部1・2年)、面接講座(商3年)【9月】推薦・総合型選考委員会通過者進路ガイダンス②(3年)【10月】大学見学会(商2年)、住友商事キャリア教育プログラム(1・4年)、入試システムガイダンス(選進3年)、大学見学会(特進部1年)【11月】専門学校ガイダンス(選進2年)、文理科目選択ガイダンス(選進1年)【12月】上級学校体験会(選進2年) ○進路に関する教員研修を4月に実施。その後、普商別の分科会も実施した。7月には新任教員向けの進路指導研修を実施。各大学や予備校などの外部業者の進路情報は、進路指導室が集約・選択して教員へ配信し、生徒へフィードバックした。 ○今年度は6月に三者面談を全学年で実施した。普通科は進路希望別に随時、3年生は推薦希望者を中心に実施することで、保護者への進路情報の提供および意思の疎通を図った。 ○放課後実施している進路補習講座は、1年生15講座、2年生14講座、3年生20講座を開講した。また、夏季休業中には成績優秀な生徒に対する補習も実施した。 ○検定試験について積極的に取り組むように促し、合格に向けた補習だけでなく、各教科の教員が個別指導を行い、現在までに日本実用英語検定では準1級に6名、2級に71名、準2級に154名が合格し、日商簿記検定では2級に5名、3級に10名が合格した。	A B	今年度の大学現役合格者数(一貫部除く)は、【国公立大学】6名、【早慶上理】14名と昨年も増加した。 ○行事間の連携強化 1年次の「キャリアガイダンス」で抱いた興味を2年次の「上級学校体験会」や「大学見学会」に繋げ、3年次の具体的な進路選択に結びつけるというようなストーリー性のあるプログラム構成を生徒・保護者に明示する。 ○多様な進路希望への対応と情報提供の拡充 進路が漠然としている生徒や多様な進路肢(公務員、海外進学、起業など)を模索している生徒に対して、より早い段階から多角的な情報を提供する機会を増やす。 ○多様な職業人との交流機会の創出 様々な業界で活躍する社会人や多様な進路選択をした卒業生を招いての「パネディスカッション」や少人数での座談会を実施し、生徒が自身の将来を具体的にイメージする機会を増やす。特に「アルバイト」を導入しているため、卒業生をスカウトし講演会をおこなうなど、キャリア育成を図りたい。 ○保護者との連携機会の質的・量的拡大 全学年での三者面談が実施され、保護者との意思疎通が図られている。入試制度の複雑化や就職環境の変化に対応するため、保護者が必要な情報を適切なタイミングで得られる機会をさらに増やす必要がある。6月の三者面談時に加え各学期ごと複数回、学年別・コース別の保護者向け進路説明会(入試制度、奨学金、学費、就職状況など)を開催。動画配信など様々なコンテンツを通じての参加も可能にすることで、参加率向上を図る。	英語検定については中高一貫部以外からも準1級合格者が増えているのは素晴らしいことである。ネイティブ教員による2次試験対策などを今後もさらに充実させてほしい。ただ、英語力には個人差もあるので、個々のレベルに応じた指導を通じて少しずつ個人差を埋めることができるようにしたい。 達成度については、目に見える形で評価できるようにしたい。 進学率や合格者数など、明確な目標設定が必要である。
3	○登下校時のルールやマナー(自転車通学者への交通安全指導も含む)は継続的に指導し、社会の一員として責任ある行動をとれる生徒の育成に努める。また、自転車盗難防止には二重ロックを推奨する。 ○安全で安心な学校環境の保持のため、教員は常に生徒の状況把握に努める。「いじめ」(体罰・ハラスメント)に関するアンケートの実施や各種講演会を通じて、生徒の生命や人権が侵されることのない様に十分な措置を講じる。併せて、スクールカウンセラーを積極的に活用して、生徒と教員が相談しやすい体制の整備にも努めなければならない。 ○重大事件につながる危険性の高い薬物乱用やSNS上の有害サイト等については、特に関係機関等を活用した指導も必要である。 ○挨拶の励行や身だしなみを整えることは、高校生としての品格を高め、自覚を促す上で不可欠である。昨年度から新制服となり、女子生徒の服装の乱れも見受けられるので、継続的な指導が必要である。 ○公共心を育み、社会の一員としての自覚を促すため、学校周辺や通学路の清掃は教育的意義が大きく、今後も引き続き実施する。 ○問題行動の未然防止と早期発見のため、教員は常に生徒の動向を注視する必要がある。	○例年通り、登下校時に各地点へ教員を配置し、新任の教員などには適切な生徒への声かけ等のアドバイスを行う。また、自転車へのロックについては、定期的には厚生係の生徒と教員による一斉点検を行い、未だ錠者へ直接注意を行う。登下校時のマナーに関する苦情については、その日のうちに各ホームルームにて担任より注意を行うとともに、指導部からもClassiを利用して注意喚起を行う。 ○「いじめ」「体罰・ハラスメント」に関するアンケートは、すべてClassiによるアンケート機能を使って実施し、問題の早期発見と対応を可能とする。 ○薬物乱用とSNSに関する問題は、外部専門家等を招いて全般的に指導する。 ○挨拶については、生徒からの挨拶を待つことなく教員自ら積極的に挨拶をするように心掛ける。また、整容指導についても検査の時だけイベントとして行うのではなく、普段から継続的に根気強く行う。 ○徳育の側面からも奉仕活動(通学路清掃など)を年間を通じて全クラスに制振り、継続的に実施する。また、オアシスの精神に基づいた言動を实践させるべく、各ホームルームや部活動、委員会活動などにより活性化させる。 ○生徒の実態把握のため、担任による個人面談や、「スクールライフ」「Classi」を有効活用したい。また、昼休みのみならず、授業中も校舎内の巡回を強化する。	○今年度も登校時8か所、下校時5か所に教員を配置し、通学路指導を継続的に行った。また、外部からの苦情の際には臨機応変に配置を変更させるとともに、「Classi」にて生徒へマナー周知を徹底したため、全体としての苦情件数は減少した。また、自転車へのロックについては、スヶック点検時に厚生係の教員による一斉点検を行ったが、多くの自転車が施錠されていない状態であった。 ○夏季休業直前の7月中旬に埼玉県保健医療部業務課の協力下、物乱用防止のための指導を1年生を対象に実施した。また「いじめ」に関するアンケートを7月・11月に、「体罰に関するアンケート」を10月・2月(予定)に、それぞれ「Classi」のアンケート機能を利用して年間2回実施し、実態把握と問題の未然防止に努めた。 ○コミュニケーションの基本である挨拶については、教員自ら積極的に生徒へ挨拶するように働きかけたが、中には挨拶に消極的な教員もみられる。また、整容指導についても残念ながら取り組む姿勢に温度差が見られる。 ○通学路を中心とした地域の清掃活動を年間を通じて各クラス単位で実施をした。また、新入生に対して部活動の加入を積極的に促すとともに、事情により途中で退部した生徒には他の部活動への加入や進路補習講座の受講を勧めるようにしている。 ○昼休みや放課後を中心に、担任による個人面談が定期的に実施され、特に「Classi」を使った日常での生徒との細かなやり取りも積極的に行われていた。	A B	○特に各学期初旬の苦情件数が多かったが、HRやClassiでの注意喚起や登下校指導ポイントの配置転換、問題地点への教員派遣は効果があった。件数削減へ向けて継続的な生徒指導が必要である。生徒数が増えた分、校門前等危険な箇所も増えてきているのでできる限り対処する。 ○薬物乱用防止の啓蒙活動はもちろん、いじめや体罰に関するアンケートについても、未然防止と早期解決につながるころが大きいため、引き続き実施する。特に社会問題となっているいじめに対する意識は生徒も教員も高まっている。さらなる理解と発生防止に努める。 ○徳育教育は本校教員の本分である。挨拶や整容指導は、特に若手教員が苦手意識を持つ傾向にあるように見える。指導が必要な生徒は一部であるが、教員全員が同スクールで行っていく。 ○担任と生徒がコミュニケーションを取る回数が増える。授業をはじめ、個人面談、Classi、清掃、補習など様々な交流機会を有効活用し信頼関係を構築していく。	交通ルールについては学校任せにするのではなく、家庭においても話し合いを持つ必要がある事項である。また、警察に啓蒙活動を要請することも効果的である。 制服の正しい着用について、校内で更に啓蒙しなければならない。 薬物乱用防止の啓蒙活動は、2・3年生に対しても実施した方がよい。
4	○各種の校外行事(オリエンテーションキャンプ、ハワイ短期留学、課題研究など)を実施し、それぞれ目標達成に努めている。特に「総合的な学習」として昨年より再開したハワイ短期留学での様々なプログラムは、青年期の発達段階にある生徒にとって資するところが大きい。今後も、さらに教育的効果を高めるため、期間が短縮される中でもよりアクティブな取り組みが行われるよう内容をブラッシュアップしていく必要がある。 ○文化祭や体育祭の教育的効果の大きさは言うまでもない。過去の反省を今後の企画に活かし、生徒の意見も取り入れつつ、より質の高い行事となるよう工夫していく必要がある。 ○行政機関などが主催する各種キャンペーンについては、地域との結びつきを考えると重要な機会なので、積極的に参加を促していきたい。	○オリエンテーションキャンプでは、主に規則の遵守、公德心・協調性の獲得を重視するとともに、教員と生徒との親睦も深められるような取り組みを意識して指導にあたる。 ○ハワイ短期留学は生徒の安全が第一で、事前指導や情報共有の徹底、現地と国際教育部との連携をもとに実施する。中でも人間関係に関わるトラブルは、共同生活からくるストレスなどが原因で短期間で発生しやすいので特に注意する。 ○大丸松坂屋での課題研究(商業実習)については、規模の縮小という大きな問題がある。今後はそれに代わるものとして、生徒主体の商品開発、起業家を招いての講演会や浦和大学との高大連携など様々な内容を企画していく。 ○文化祭では食品販売を3年生に限定し、他学年においては展示や研究発表などを中心として、今まで以上に教育的効果や達成感を得られるように工夫する。 ○外部機関や団体が主催する各種のキャンペーンや行事について、生徒の安全を十分に考慮した上で、可能な限り参加希望生を派遣する。	○今年度も群馬県猿ヶ京温泉にてオリエンテーションキャンプを行い、生徒相互の親和と教員による生徒理解を深める良い機会となった。一方で、猿ヶ京でのオリエンテーションキャンプも3年目となり、ホテル側の不備や行程中のトラブルなど一部見直しが必要な部分も出てきている。 ○ハワイ短期留学は円安のため今年度も11日間で開催した。生徒の安全を第一に、事前指導の徹底と引率教員と担任との連携を密に図ったが、現地での人間関係のトラブルが何件か発生した。 ○大丸松坂屋での課題研究は、松坂屋上野店にてビジネスマナーや梱包作業の体験、職場見学などを行ったが、今年度より生徒一人当たり1,000円の研修費を支払う形での実施となった。一方で高大連携による浦和大学での模擬講義を2日間受講し、貴重な体験ができたことと生徒から好評であった。また、3学期には日本旅行の方による講演会も予定されている。 ○今年度の文化祭も、来場者に制限を設けた形で9月7日(土)・8日(日)の2日間に亘って開催された。生徒会が中心となって企画・構成を行い多くの団体が参加し、販売・展示・ステージ発表共に非常に盛況であった。今年度の体育祭も学年別での実施だったが、1、2年生については悪天候により中止となってしまった。	A B	○オリエンテーションキャンプについては、高校生になりたての生徒に対する卒業までを見越した教育効果が相変わらずある。場所や内容の見直しに引き続き効果的になり得る。 ○ハワイ短期留学を11日で行うことについては良い面と悪い面があるが、本校の教育の一貫として欠かすことはできない。引率教員と学年教員の意見を聞きながら、負の要素削減に努める。 ○課題研究は実務的なことを学べる貴重な機会でもあり、以前と形式は変わったも効果的である。浦和大学などから力を借り、より良い形で改善していく。 ○校内行事は各学年の実情を考慮し、生徒が充実感を持てる形でできる限りやりたいことを実現していく。	オリエンテーションキャンプは伝統的な学校行事であるので、場所や日程が変わっても、時代に合わせた形で存続させてほしい。 ハワイ短期留学に備えた炊事や洗濯などの訓練をオリエンテーションキャンプで実施してはどうか。
5	○募集活動は私立学校存続の要であり、常に全教職員がその重要性を理解して募集活動にあたる必要がある。昨年度の入試説明会はほぼコロナ禍前の形式で行うことができ、参加者も前年度を上まわった。個別相談件数も併願推薦普通科192人増、同商業科540人増で、受験者数増加が果たった。相談件数増加要因の一つには、数年来実施のWEB視聴型入試説明会があげられる。これにより説明会の予約が取れなくともWEB視聴により個別相談会に来校できるため、受験生と保護者からは好評で、年々この傾向が強まっている。 ○受験生の多くはホームページから受験情報を得ており、新しい情報や取り組みを積極的に配信する必要がある。また、塾等主催の外部説明会も再開され、多くの受験生への情報伝達の場として活用できる。	○昨年度は校内での入試説明会を6回、個別相談のみの回を4回行い、WEB説明会を加えて個別相談件数は増加した。これを受け今年度は個別相談のみの回を5回実施して個別対応に力点を置き、課程選択をはじめ個別質問への対応など、より丁寧な募集活動を実施したい。また、コースの特色や成績レベルを明確にするため推薦基準を一部変更、受験生と保護者、中学校や塾等に対して丁寧に説明したい。 ○昨年度は1号館が完成し、新しい施設の紹介を兼ねてUJカフェ(食堂)やスポーツスタジオも使用して説明会を行った。はじめての試みに対し諸方面の協力を得て円滑に進めることができたので、今後も昨年度の反省を活かし準備を進めていきたい。 ○塾主催の外部説明会、中学校PTAの学校見学や中学校での進路講演会などがコロナ禍前の状態に戻って来ているので、積極的に本校の良さをアピールし、志願者増加につながる広報活動に努めたい。	○今年度も校内説明会および個別相談会への参加者が非常に多く、事前のWEB予約も開始後、数日で満席になってしまった状況だった。昨年度までと同様にWEB版入試説明会を視聴することで個別相談会に参加できるシステムは受験生の保護者から好評だった。 ○今年度は塾や外部団体主催の説明会に21回参加。特に9月以降の外部説明会では、相談件数が参加校の中で常に上位だった。コース制による幅広い成績層の受験が可能な点と新しい施設・設備や進路実績等が多くの方から評価されていると実感できた。 ○北辰テスト結果から得られる情報として、本校志望者数は昨年度と比較すると全ての回で増加傾向にあり、第6回(11/3実施)では4,443人(昨年度同時期 3,925人)、うち第1志望者は353人(昨年度同時期 329人)だった。また、2025年度入試の推薦基準を見直し、各コースの成績基準を上げたことで本校志望者の成績層が変わり、志望者全体の平均偏差値が上がった。推薦基準を変更したにもかかわらず、志望者が増加傾向にあることから、本校の学習指導および進路指導への期待の大きさが感じられる。 ○今年度より塾や教育機関の関係者対象説明会を、外部施設ではなく、本校1号館スポーツスタジオにて実施。説明会終了後の校内見学会が好評だったので、今後も継続していきたい。 ○ホームページによる広報活動にも力を入れ、学校行事はもちろん、部活動の実績報告や見学会への案内など、本校の最新情報を配信した。	A	○2025年度入試における志願者数は普通科2879名(前年+27)、商業科945名(前年-331)、合計で3824名(前年-304)。入学者数は普通科が664名(前年+18)、商業科が252名(前年-58)、合計で916名(前年-40)である。昨年度と比較すると入学者数は減少したが、今年度も募集人員を上まわる入学者数となった。今年度は商業科の単願推薦と併願推薦の成績基準を変更したため、志願者数・入学者数が減少した。普通科も推薦の成績基準を見直し、一部変更したが志願者への大きな影響はなかった。昨年度と比較すると入学者数は減少したが、合格者数に対する入学者数の割合が普通科、商業科ともに高く、本校を受験する際、「私立第一希望は浦和実業」としている受験生が増加していると考えられる。 ○今年度も塾主催の説明会、各中学校PTAによる本校見学会、各中学校主催の進路講演会など様々な形で募集活動を行うことができた。また、WEB版入試説明会や本校文化祭での説明会、塾主催説明会での個別相談は受験生とその保護者から好評なので今後も続け、ホームページを利用した広報活動にも力を入れていきたい。	現在、高校の生徒募集は堅調であるが、少子化が更に進む中で現状に満足することなく、早期の対策を検討してほしい。孫の世代まで学校が存続することを期待する。 受験者数と入学者数は増加しているの、学校は自信を持ってよい。また、学力レベルの向上を目指すしたい。